独りの小さなラクダ

独りの小さなラクダ

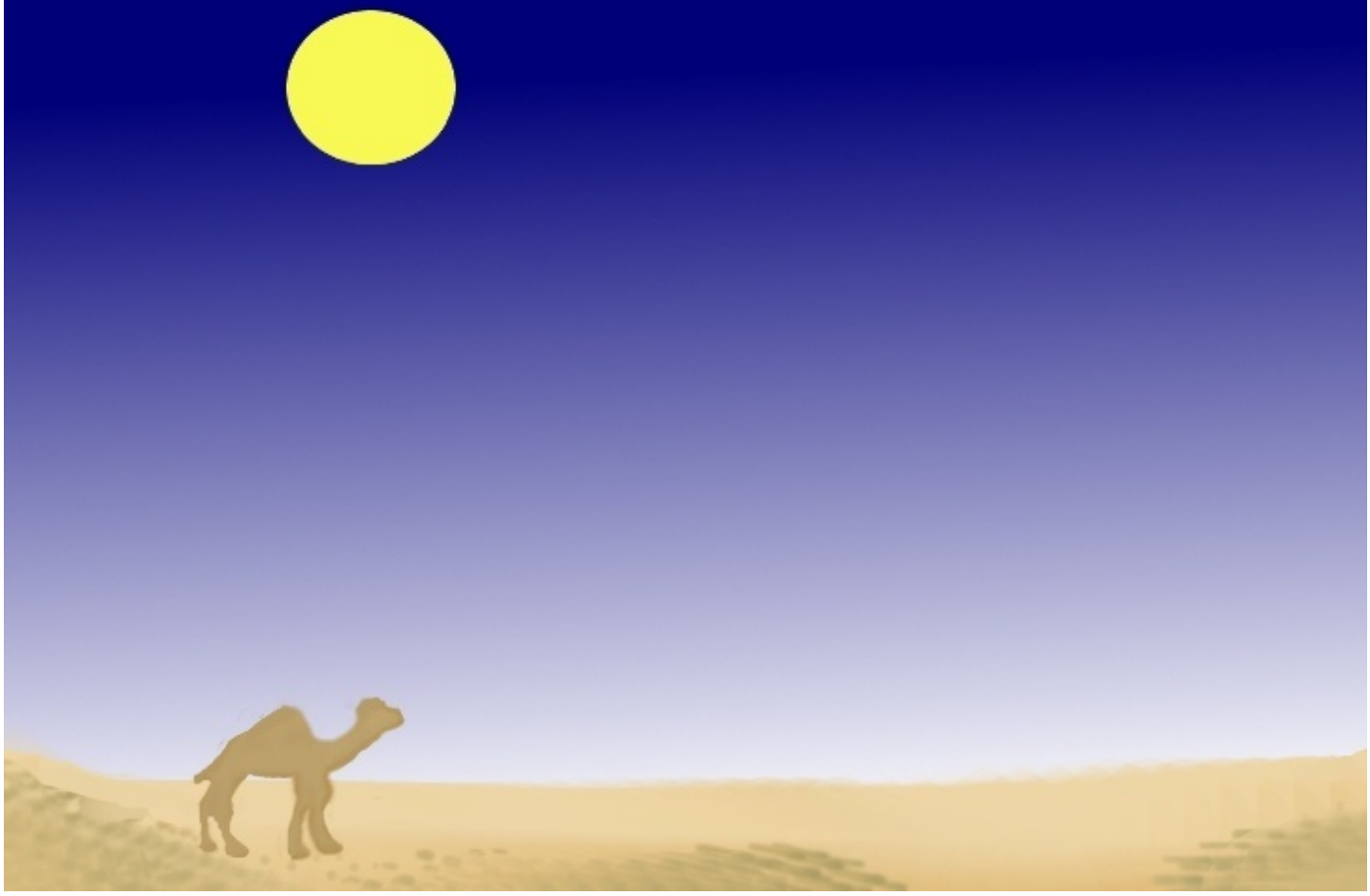
一匹の小さなラクダがいました。

小さなラクダは、独りきりで旅をしていました。ラクダはなぜ自分が独りでいるのかわかりません。旅を続けるうちに、長い長い時間が経ちすぎて、なぜ独りで旅をしているのか、忘れてしまっていたのです。それでもラクダは、歩き続けました。

延々と続く砂漠を越えていきました。

たくさんの朝日を越えていきました。

いくつもの夕日を越えていきました。



そしてある夜のことです。夜空に昇ったお月様がとても大きく輝いていた夜でした。きらきらのお月様が砂漠を明るく照らしている様子がとてもきれいで、吸い込まれるように小さなラクダは、お月様を見入っていました。

すると、お月様の光に照らされた小さなラクダのガラス玉のような瞳から、たくさんの涙があふれてきたのです。そして、なぜ自分が旅をしているのかを思い出したのです。

小さなラクダは、むかしから独りではなかったのです。家族と遠く遠くの静かなオアシスで

のんびりと暮らしていました。小さなラクダは、家族が大好きでずっとみんなで楽しく暮らしていけると信じていました。

しかし、ある朝に小さなラクダが目覚めると家族はケンカをしているのです。小さなラクダには、なぜケンカをしているのかわかりませんでしたが、とてもみんな機嫌が悪いように感じていました。

ですが、小さなラクダには、どうしたら家族が仲直りをしてくれるのかわかりません。それからも家族は終わることなくケンカを続けています。仲の良かった家族は、むかしの家族とはちがい、みんなのきれいだった瞳がどんよりと

した雨雲のように曇り、イライラしているのが伝わってきます。ケンカは、さらに長く続き小さなラクダは、機嫌の悪い家族の顔を見るのが怖くなってしまい辛く悲しい気持ちを抱えたまま毎日を過ごしたのです。

そして、小さなラクダは、どうしたら良いのかわからず、だれともお話をしないで独りで考えて、誰ともお話をしないで独りで決めてしまったのです。

小さなラクダは、もし自分がいなくなれば家族は心配するだろう、そして自分を探すためにケンカをやめて仲直りをしてくれるのではないかと考えたのでした。

夜空に昇ったお月様がとても大きく輝いていた夜、小さなラクダは家族に内緒でひっそりと慣れ親しんだ静かなオアシスを旅立ったのでした。

独りで旅に出た小さなラクダは、仲直りした家族が迎えに来てくれることを信じて、遠くへ遠くへを歩き続けました。そして、長い長い時間が過ぎていきます。それでもなかなか家族は迎えに来てくれません。まだまだラクダは歩き続けるのでした。

そして……

延々と続く砂漠を越えていきました。

たくさんの朝日を越えていきました。
いくつもの夕日を越えていきました。
小さなラクダは、長い時間が経つにつれ、いつの間にか家族の笑顔を少しづつ少しづつ忘れてしまいました。

そして……
延々と続く砂漠を越えていきました。
たくさんの朝日を越えていきました。
いくつもの夕日を越えていきました。
小さなラクダは、長い時間が経つにつれ、いつの間にか旅の理由も少しづつ少しづつ忘れてしまいました。

しかし、どれだけたくさんのことを忘れても小さなラクダは、辛く悲しい気持ちだけは忘れることなく心に残り続けました。

それでも小さなラクダは、歩き続けます。そして夜空に昇ったお月様がとても大きく輝いていた夜、夜空を見上げた小さなラクダはきらきらの瞳から流れる涙ともに忘れていたことを思い出したのです。全てを思い出した小さなラクダは、家族のことがとても心配になり、いまは遠く離れてしまった家族と暮らしていたオアシスに戻ってみることを決めました。

そして……
延々と続く砂漠を越えていきました。
たくさんの朝日を越えていきました。
いくつもの夕日を越えていきました。
いつの間にか忘れていた家族の笑顔を、少しづつ少しづつ思い出したのです。

そして……
延々と続く砂漠を越えていきました。
たくさんの朝日を越えていきました。
いくつもの夕日を越えていきました。
いつの間にか忘れていた家族の温もりを、少しづつ少しづつ思い出したのです。

長い長い時間をかけて、小さなラクダは、懐かしい家族と暮らしていた静かなオアシスにやっとの思いでたどり着くことができたのでした。

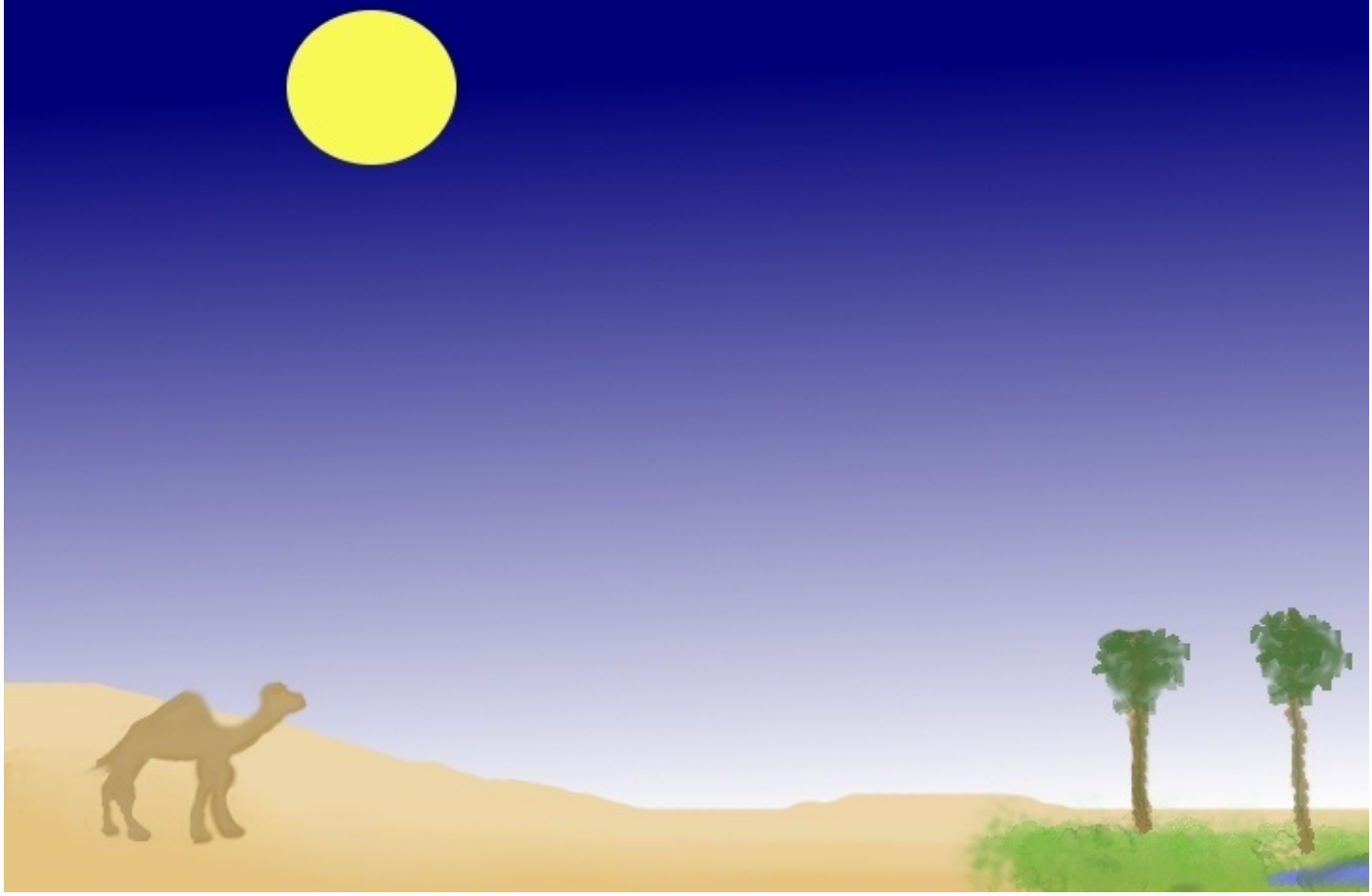
それは、小さなラクダが家出をした夜と同じようにお月様がきらきら輝く夜のことでした。

しかし、そこにいたのは小さなラクダの家族ではなく、別のラクダの群れだったのです。

驚いた小さなラクダは、群れの中にいる年老いたラクダに尋ねました。

「ここに住んでいたラクダの家族はどこにいきましたか？」

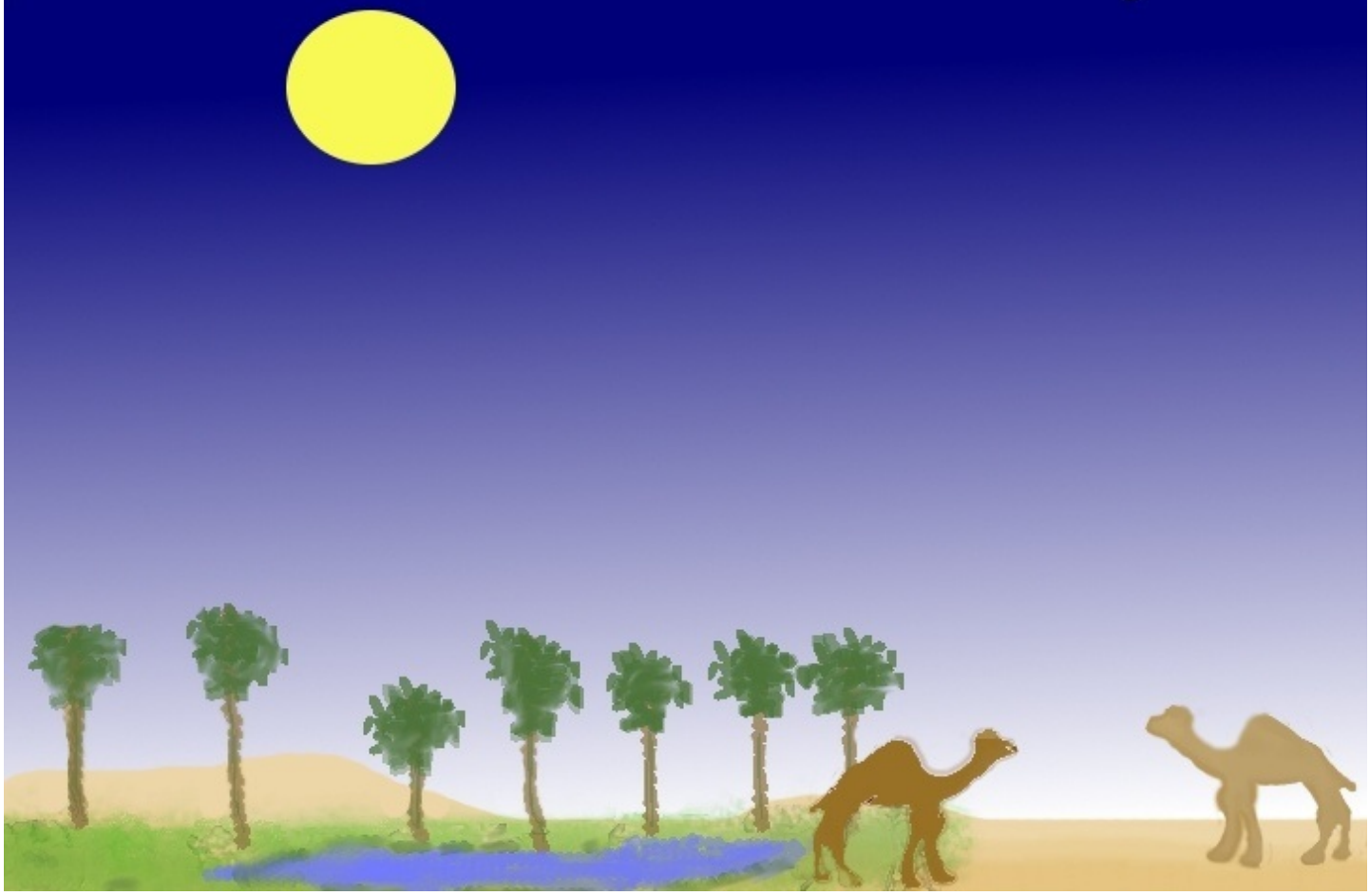
年老いたラクダは答えます。



「ここはずいぶん前からわしたちが住んでいるが、その前は仲の悪い家族が住んでいたそうじゃ。そこの小さなラクダが家出をしたのをきっかけにもっと仲が悪くなり、家族はちりじりになってどこかへいってしまったらしい」

その言葉を聞いた小さなラクダは、驚き深く悲しみました。そして小さなラクダのガラス玉のような瞳から、たくさんのたくさんの涙があふれてきます。小さなラクダは、涙を止めることができず、しくしくと泣き続けました。

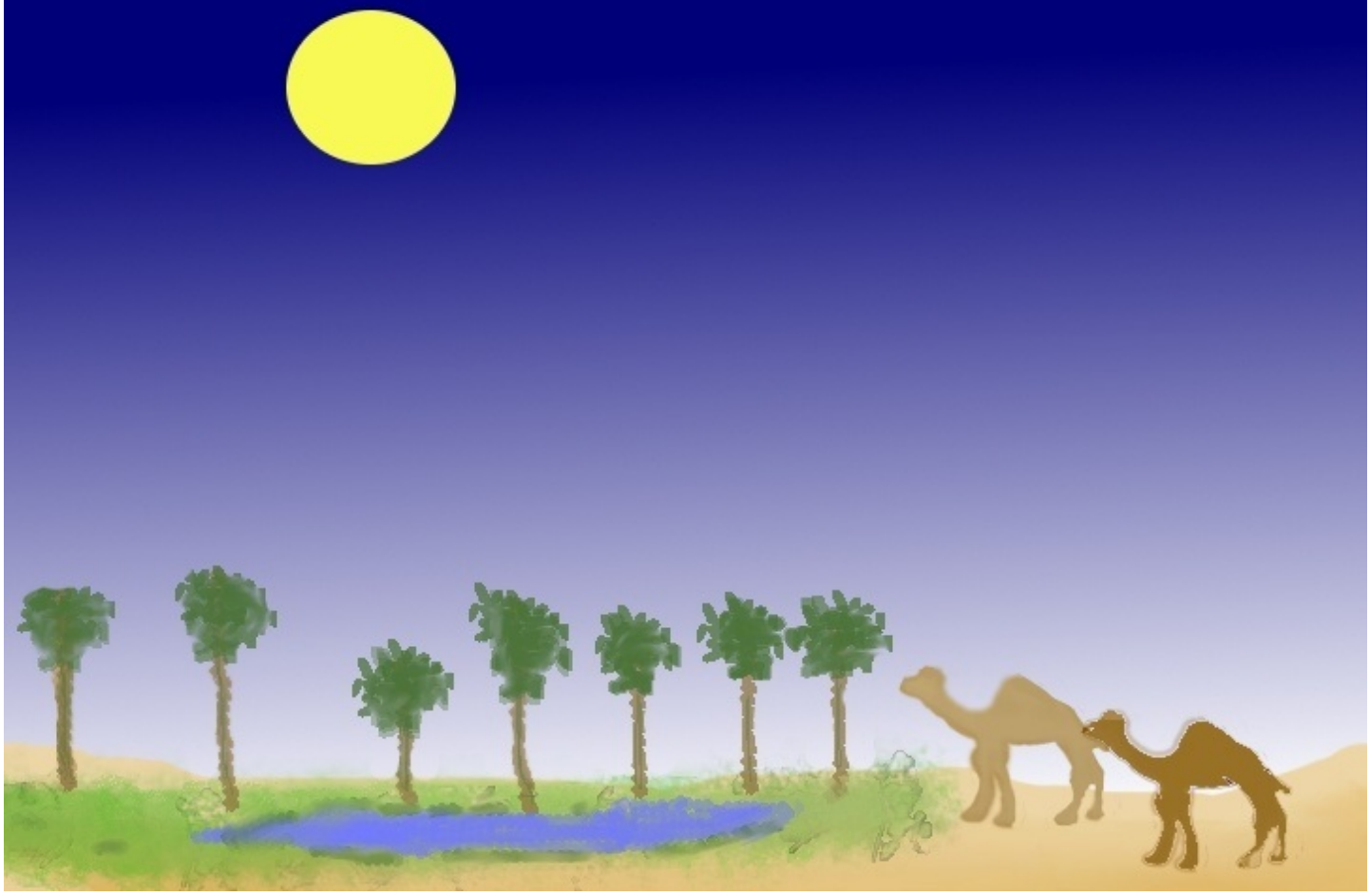
自分がいなくなったことで家族は、もっとケンカをしてしまった、自分がいなくなったことで家族は、ちりじちになってどこかへ行ってし



まった、その言葉を聞かされた小さなラクダは、もっと家族とお話をしてみんなで仲良くなれる方法をさがすべきだったと深く後悔をしたのでした。それでもいくら後悔をしても家族は元通りにはなりません。

涙を止めることもできず、悲しみと後悔に浸りながら、小さなラクダは、懐かしいオアシスの泉を見に行ってみることにしました。そこには、まだ家族の面影が残っているような気がしたからです。

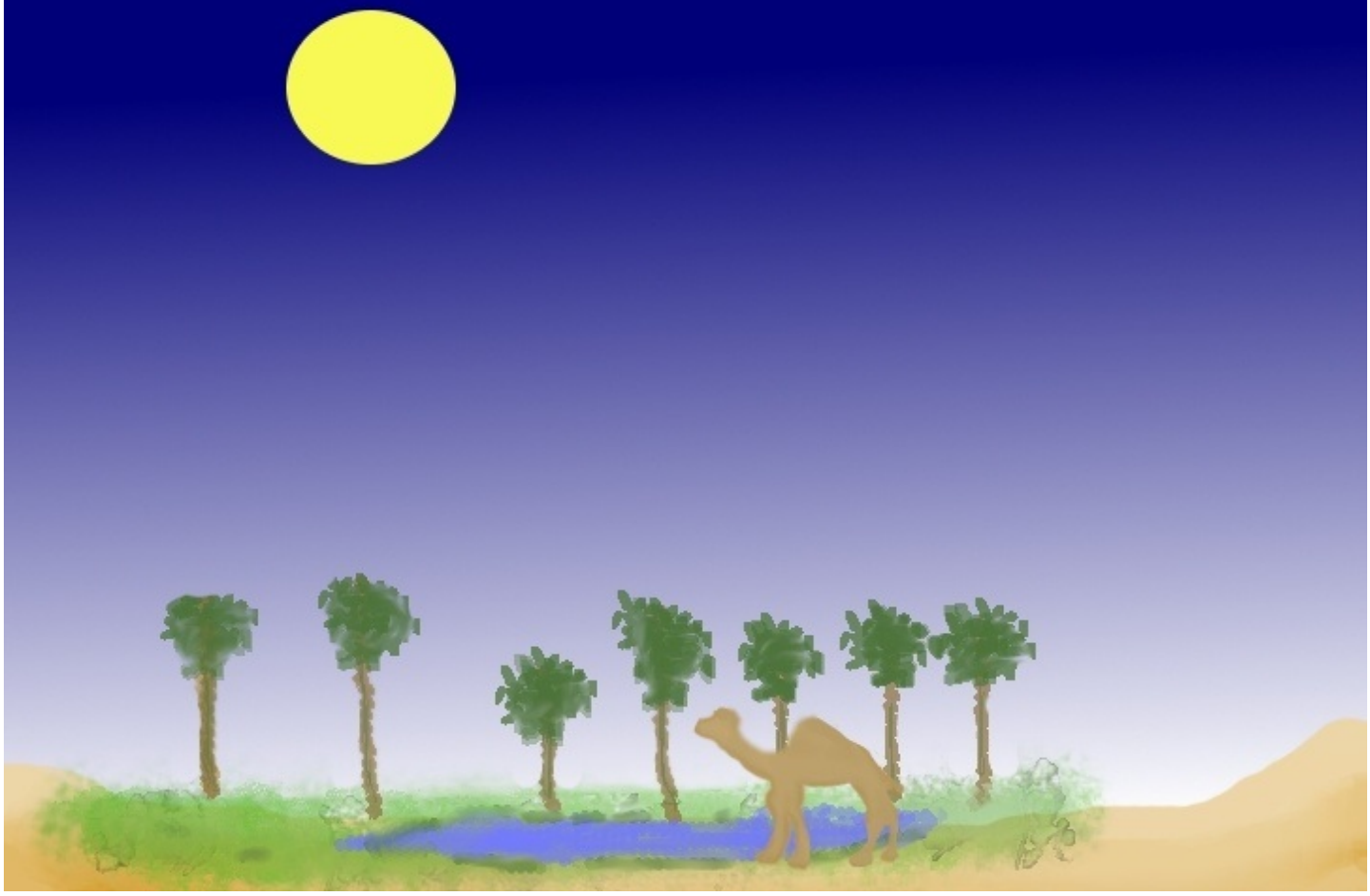
オアシスの泉の水面は、きらきらに輝くお月様のひかりに照らされて輝いていました。そしてきらきらと輝くオアシスの水面を、小さなラ



クダは覗き込んだのです。

そこには、まだ家族が仲の良かったころに見た、幼く小さなラクダの顔ではなく、懐かしいお父さんラクダに、そっくりな自分の顔が映っていたのです。それは、長い長い時間が過ぎて子どもだった小さなラクダは、オアシスを旅立ったころのお父さんラクダと同じような年齢になっていたということでした。

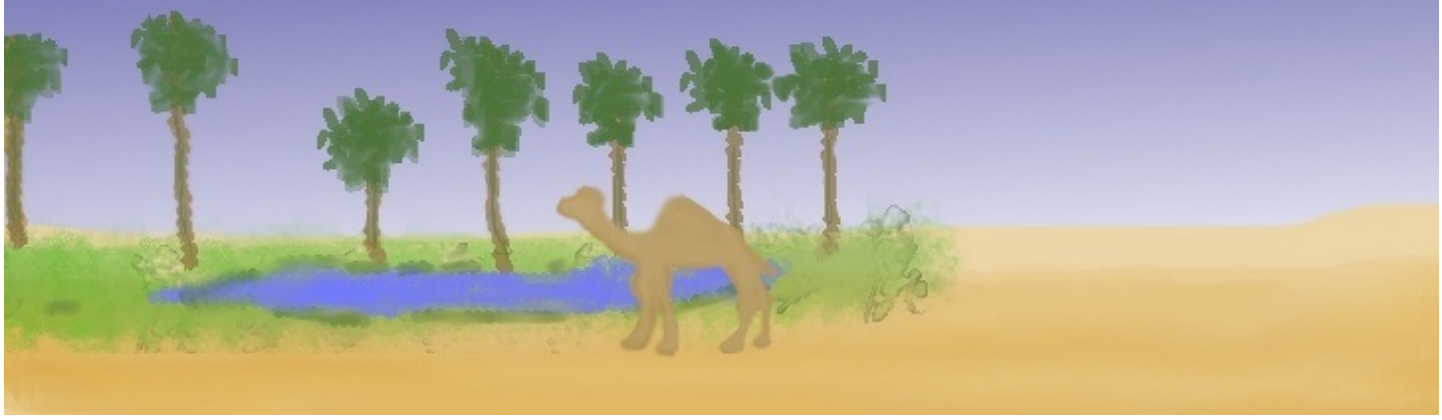
小さなラクダは、水面に映るお父さんラクダそっくりの自分の顔に驚き戸惑いましたが、じっと見詰ているうちに、すこしだけ笑ってみようと思いました。涙を流しながらでしたが、小さなラクダは悲しい気持ちを抑えて笑顔を作り、



水面に笑顔を映し出します。

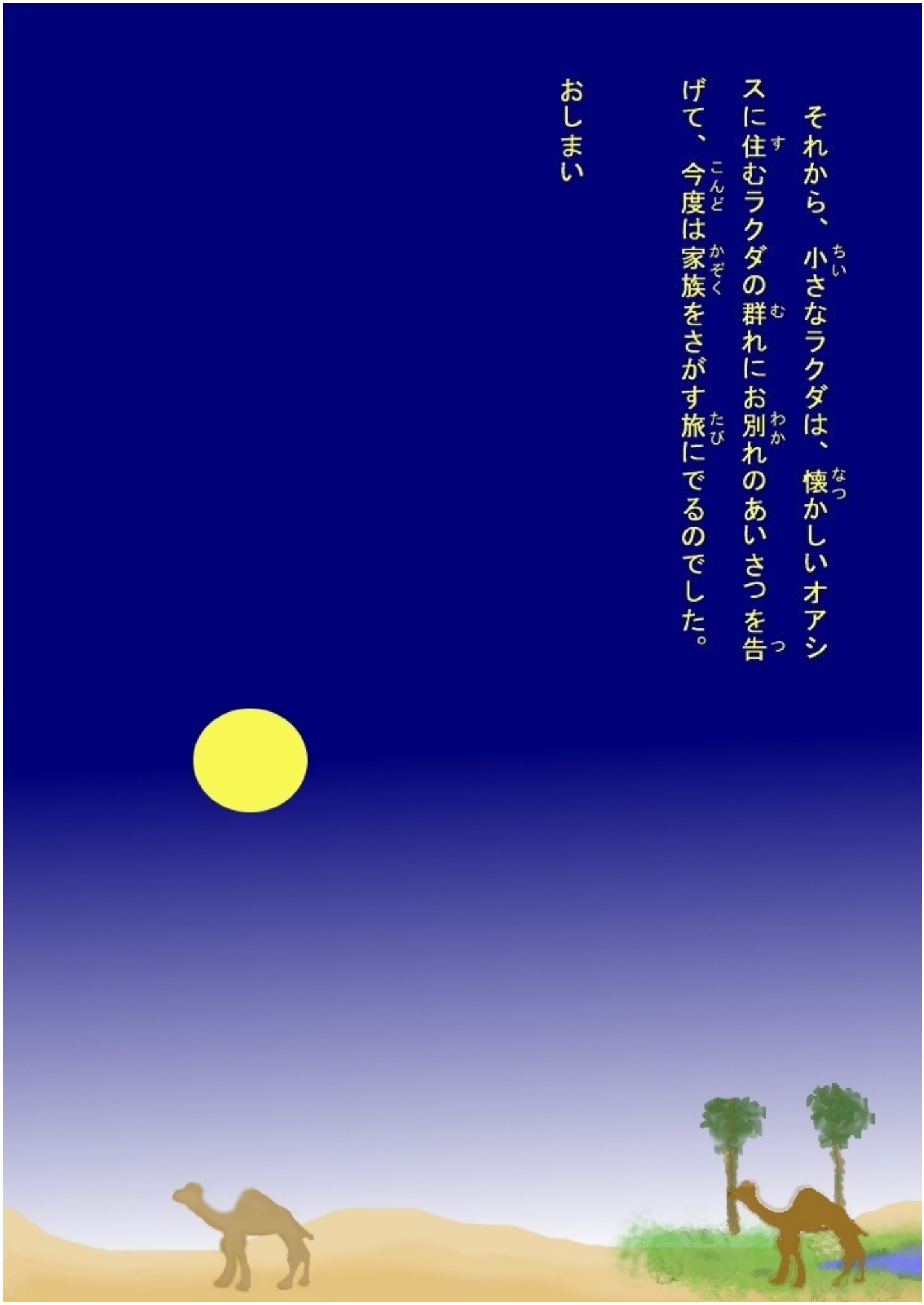
小さなラクダが作った穏やかな笑顔は、お父さんラクダがニコニコしていたころの顔そっくりでお母さんラクダやお兄さんラクダたち、お姉さんラクダたちも近くにいるようなそんな気持ちになりました。

そして、この静かなオアシスを旅立ったとき、最後に見た怖いお父さんラクダの顔ではなく、やさしく微笑むお父さんラクダにそっくりな自分の笑顔を眺めているうちに小さなラクダの涙が止まり、透明に透き通った静かなオアシスの水面のように穏やかな気持ちなったのでした。



それから、小さなラクダは、懐かしいオアシスに住むラクダの群れにお別れのあいさつを告げて、今度は家族をさがす旅にでるのでした。

おしまい



● あとがきとおれい ●

あとがきまで読んで頂ける方
が、いらっしゃることを期待して
書かせていただきます。

まだまだ荒削りな文章ですが
最後まで読んで頂きありがとう
ございます。

今回は、童話ということで
ラクダを題材にして書かせて
頂いたのですが、ラクダは
とても目が綺麗な動物の
印象があってそこにお月様を
交えて創作してみました。

また、挿絵も描いてみて
ラクダや動物の絵はとても
難しく感じてしまい悪戦苦闘
を繰り返しての絵になります。

それでは、全ての関係して
頂いた皆様、読んで頂いた皆様
さらにパブー運営者様方
こころからお礼申し上げます。

最後に……らくださん！！
ありがとうございました！！

独りの小さなラクダ